

開発の現場から

スタートアップ起業家に必要なものとは？

阿部 直美

有限会社 IMG

タジキスタン共和国ビジネス・インキュベーション・プロジェクト

山に囲まれた内陸国

タジキスタンは国土の 93%が山岳地帯であり、アフガニスタンと 1,357 キロメートルの国境を接しているほか、西にウズベキスタン、北にキルギス、東に中国との国境を擁する旧ソ連の中の最貧国である。ソ連時代に意図的に引かれた国境により、多くのタジク民族がウズベキスタンのサマルカンド、ブハラ地方に住み、またフェルガナ盆地のタジク側にはウズベク人が多く住んでいる。キルギスとの国境では道路のこちら側はタジキスタン、向こうはキルギスというような場所もあり、水路の利用を巡っては地域的な争いが国レベルの問題に発展することもある。

ソ連時代の主な産業は綿花栽培と、豊富な水資源による水力発電を利用したアルミ加工で、石炭を中心とした国内の鉱山開発は主に中国企業が握っており、鉱山の周りには交通標識も中国語で書かれている「リトル・チャイナ」ができています。

タジキスタンにおける労働移民問題

外貨獲得の大きな手段はロシアやカザフスタンに出稼ぎに行くいわゆる労働移民からの仕送りであり、2019年にはGDPの30%以上、約25億ドルがロシアへの移民からの送金で占められ、2013-2018年の5年間で150億ドルが銀行などを利用して送金されたと言われている。¹

特に雇用機会が限られている地方においては、家長が出稼ぎに行き男性不在の家庭も多い。出稼ぎ先の労働環境がよくないことは想像に難しくなく、ブローカーに借金をして渡航し、狭いアパートで何人もが共同生活をしていることも一般的で、労働災害で亡くなるケースも多く見られる。また、現地で新しく家族を持ち、タジキスタンの留守家族への送金が滞ったり、家族の元に戻ってこなかったりすることが社会的な問題にもなっている。

彼ら労働移民がタジキスタンに帰国した際に、辛い経験を話すことが少ないからか、地方の子供たちに将来の夢は？と聞くと「労働移民」という答えが返ってくることもある。

¹ “A Critical Lesson for Tajikistan: The State of Migrant Workers in 2020”. The Diplomat (Web-version) <https://thediplomat.com/2021/01/a-critical-lesson-for-tajikistan-the-plight-of-migrant-workers-in-2020>

これは、ある程度まとまったお金を持ち帰ってくれる父親や親戚に接する機会があることによると同時に、子供たちにとってのロールモデルがいかに少ないかも表していると思う。

コロナ禍と労働移民

そのような中、2020年初めからのコロナ禍はタジキスタンの財政状況を直撃した。ロシアから強制退去させられた労働者、あるいは毎年春になると出稼ぎ先へと行っていた労働者が渡航することができず、タジキスタン国内にとどまらざるを得ない状況となった。

もともと JICA タジキスタン事務所では、コロナ禍と関係なくタジキスタンに（予定通り）帰国した労働移民や、労働移民予備軍を主なターゲットとした「ビジネス・インキュベーション・プロジェクト」を2020年3月より開始する予定であった。帰国した労働移民が持ち帰るある程度の資金と技能をもとにした起業を支援したいと考えてのものであったが、プロジェクト開始とコロナ禍の始まりが同時期に重なったために、「支援」の意味合いが少し変わり、また緊急性を要したものとなった。

労働移民の起業支援

タジキスタンに日本から専門家が来ることができず、予定通りの開始ができるか危ぶまれたが、幸い現地側プロジェクトスタッフに恵まれ、予定通り2020年3月にプロジェクトを開始することができた。

予定では、上記のとおり帰国した労働移民たちを中心に徹底して「ビジネスの基礎」を教えることをプロジェクト活動の中心としていたが、さらにそこに加えて、「ビジネスの基礎」講習後に作成されたビジネスプランをもとに、一人あたり5万円相当までの資機材を貸与するスキームをプラスした。対象は、コロナ禍で帰国を余儀なくされたもしくは出発予定であったものの渡航できなかった者に限定し、グループによる応募も可能とした（人数×5万円）。

起業アイデア

ロシアで労働移民が従事する仕事は、男性であれば建設業、タクシー運転手、自動車修理工が多く、女性は皿洗いや清掃などがほとんどである。それらの経験を反映してか、起業アイデアは男性の90%以上が内装業、自動車修理、洗車、女性はほぼ全員が縫製かベーカリーで、それ以外のアイデアはほとんどと言ってよいほど出てきていない。グ



女性の帰還移民を対象にしたビジネス講座



ビジネス講座で学ぶ帰還移民

グループでの応募も思ったほど出てこず、これは信頼関係を築けるパートナーが見つからないことが主な理由となっている。

また、機材を貸与したあとに比較的順調にビジネスが回っているように見えるのは、もともとの教育レベルが高かった人や、出稼ぎ先である程度の仕事を任せられているケースが多い。

多様性を目指して

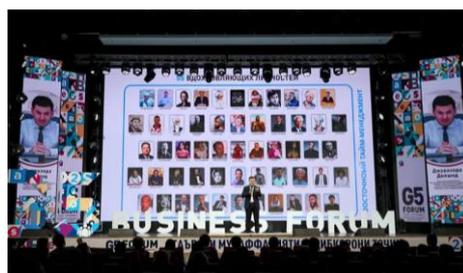
上記のように、プロジェクトとしては社会的、財政的な観点からの脆弱層にアプローチしているが、カウンターパートとしている「国家機関ビジネスインキュベータ」は教育レベルも高い都市の若者を主なターゲットとして活動している。



ドゥシャンベ・ビジネス・インキュベータ

プロジェクトも拠点を置いている「ドゥシャンベ・ビジネス・インキュベータ」は、日本のインキュベーション設備とも遜色のない施設で、IT 関係を中心とした起業家へスペースを貸し出しているほか、各種のイベントも行っている。中でも毎年開かれている「ビジネスフォーラム：G5」というイベントは、タジキスタン国内で成功している起業家の他、近隣諸国からもスピーカーを招き、TED スタイルで講演を行うもので、特に都市のポッシュな若者を引き付けている。

実はプロジェクト開始にあたって、個人的にはこのような活動はどうも地に足がついていないと考えており、もっと地道な活動が必要ではないかと思っていた。華やかなイベントにお金をかけすぎるのはどうか、という思いは今でもないわけではないが、一方では、やはり首都からだけでも夢やアイデアを持たせるような活動も、国全体を牽引していくには不可欠だと思いつつ至るようになった。



ビジネスフォーラム：G5

ジェンダーの視点から

ソ連崩壊後、中央アジアで欧米のドナーを中心に支援が始まってからというもの、マイクロファイナンスなどは女性起業家やグループ限定とするところも多かった。女性のほうがまじめに働き、デフォルトも少ないというのが理由の一つであったと認識しているが、ソ連時代に技術者として働いていた男性が職を失い、語学や経理といった勉強をしていた女性の方が安定した職についているケースが多く見られたキルギスやカザフス

タンなどでは、この差別化がかえって社会的問題を誘発しているように感じられたものであった。タジキスタンでは、特に地方部では女性の教育機会が低いこともあり、必ずしもこのアプローチが悪くはないと考えるが、一方でマイクロファイナンスも含め、「女性起業家支援」といったときに、

判で押しのように縫製やベーカリーとなってしまうことに、打開策が見えていない。

結局は、「ビジネスの」教育が必要なのではなく、包括的な教育が一番大きなカギなのではないかと、今さらながらに思い知らされているところである。



フォーラムスピーカーには女性起業家も